

北山 忍 Shinobu Kitayama
(ミシガン大学心理学部教授)

する。どうやら、日本人の多くは自分の利益を考える際に、他者の利益とついつい比較してしまうらしい。自分のところに予算がいくらつくかより、それが他の部署より多いのか少ないのかの方に気が向いてしまうのだ。その結果、自分の仕事は放っておいて他者を何とかしてけ落とそうとするといったように、さもしい貧弱な精神が見られることがある。しかし、何も悪いところばかりでもない。他者や他の部署と切磋琢磨してお互いに競い合うこともある。根は一緒のところにあるのだ。

自他があまりに依存しあっている、互いに比較しあっていないと気がすまないというこのメンタリティーは他のいろいろな側面に見ることができる。たとえば、近年多くの心理学者が「注意の幅」に文化的な違いがあると指摘してきている。京大の卒業生で現在カナダにいる増田貴彦君が行った研究では、アメリカ人と日本人が日常のいろいろな場面のどこに注意を当てるのかが検討されている。結果は明らかで、アメリカ人の方は中心的な「もの」に注意をあてるが、日本人は「もの」と周囲の関係の方により多くの注意を配分するという。

欧米人の場合、まず対象がある。もちろん対象を周囲に関係づけることはできるのであるが、まず注意を向けて考えるのは対象なのである。よって、社会的場面では他者の利益はさておき、まず自分の利益の絶対量を考える。これに対して日本人の場合、まず周囲との関係がある。もちろん対象について考えることはできるが、その考えはあくまでも周囲と相対的なものになる。よって、社会的場面では自分の利益の相対量を

考えるのである。

暗黙の心理特性と明示的な自己認識

さて、ここまで見てきた例ではすべて、実際に観察しているのは実験参加者の行動である。たとえば、西條先生の研究では、実験参加者がどのような報酬分配の方略をとるかが観察されている。これらの観察に基づいて日本人は関係志向、かつ関係依存であると結論している。これらの実験で実験参加者は、自分は包括的な注意を持っているとか、私はこういう報酬分配の方略を使っているなどとはっきり言っているわけではない。おそらく尋ねたところで、自らの行っていることを正確に言い当てることのできる人はまれであろう。つまり、これらの心理特性は、いわば無意識的かつ自動的であり、その意味で、暗黙のものであるといつてよい。

興味深いことに、「自分はXXXだ」といったように明示的な自己判断を見てみると、日本人、特に若い人は、関係性を否定する傾向がとても強いということがわかっている。暗黙の指標では極めて関係志向・依存であるが、明示的な指標では関係否定的であるというこの矛盾はどのように理解したらよいのだろうか。

私は、暗黙の心理特性の方は、文化が何世代にもわたって蓄積してきた日常の習慣によって育まれてきているのではないかと考えている。日本の文化は、古来農耕を基盤にして発展してきたが、これに儒教・仏教といった基本的に人間関係を重んじる思想が加わって成り立ってきている。これらの日常の習慣はとても関係志向的で、思わず知らず、いわば自動的にまわりに注意が行ってしまう暗黙の心理特性はこれに対応しているのである。

これに対して関係性を否定し、自分の利益を利己的に追求しようとする明示的な自己認識の方は、メディアなどをはじめとするいろいろな情報源から得られた知識に基づいている。特に日本では戦後この方、関係性とは「昔の」「古い」もので、これらの関係性から解放されることが近代化の要件であるといった議論が特にインテリ層を中心になされてきた。西洋の個人主義とは、個人の権利を根底において社会関係を作り上げる考えだが、すでに世間に埋め込まれ関係性になんじがらめになっている日本人にとって、「コジンシュギ」とはすでにある関係の「呪縛」から解放されることだったのだ。丸山真男などはそのような論壇の中心だった思想家だ。

関係否定的な個人主義の流れ

個人主義とは実はとてもあいまいな概念で、近代西欧の社会基盤を築いた、「社会関係をつくる大前提としての個人」という考えは、実は幾多ある個人主義の定義の中のひとつでしかない。話はちょっとわき道にそれるが、しばらく前にフランス人の知り合いと話しているとき、ヨーロッパの各地にあるヌーディスト・ビーチの話になったことがある。なぜ大の大人がよりもよって素っ裸になりたがるのだろうかというきわめて率直な疑問をぶつけたところ、この知り合いは、ヌードになることはすなわち社会的制約すべてをとりはらうことであり、この意味において個人主義の表現に他ならないと説明し、こちらは妙に納得した覚えがある。個人主義と一口に言っても、そのために裸になる人もいれば、関係性を切り捨てる人もいる。

いずれにしても日本においては、関係を否定することは「新しく」、

「近代的」で、かつ「進歩的」なことなのだという議論が戦後半世紀の間に日本全域に急速に広まった。全共闘時代まではインテリだけにとどまっていたが、バブル期に一流商社のビジネスマンに広まり、拝金主義を標榜した彼らは「エコノミックアニマル」の悪名を世界にはせた。さらにバブルの崩壊後は、今度はこれが日本全国の津々浦々まで及ぶ。たとえば、「自己責任」の名の下に地方のコミュニティは崩壊し、人間関係や組織の規範などに修復不可能なほどひびが入ってきているところも多いように思われる。現代の若者が明示的にはとても関係否定的だというのは、過去四半世紀日本を覆ってきているこのような思想の流れの中に位置づけてみるとよく理解できる。

ここに見られる現代日本人の自己矛盾は、どのような効果をもっているのだろうか。

悪循環がもたらすもの

そこで、1つ思考実験をしてみよう。ここに関係性があったはじめてやる気になり、関係性があった初めて目が輝き、そして関係性があった初めてどこに注意を向けたらよいか了解する人間がいたとしよう。ところがこの人は同時に、関係性のゆえに自分は本当の自分になれないでいると強く信じているとしよう。するとどうなるだろうか。まず試験で失敗するなど何か悪いことが起きると、これは何らかの関係性、たとえば、友達関係が悪いからだというように考えるだろう。すると、何とかして関係性を切り捨てようとするだろう。しかし、関係性を切り捨ててしまうと、やる気も失せ、注意も散漫になり、目から輝きも消えてしまう。そこでますます悪いことが続けて起きる結果になる。実際の原因

は、自分の暗黙のメンタリティーを了解せずに関係を否定していることにあるのだ。だから、関係を回復したらよい。しかし、すべての諸悪は関係にあると信じているから、当人はそうとは考えず、ますます関係性を切ってしまう。これは悪循環である。暗黙のうちに関係志向の人が明示的信念として関係を切り捨てると極めて深刻な結果が生じると予測できる。

私は、この悪循環が最近の日本社会が抱えてきている諸問題、たとえば無気力、自殺、引きこもり、ニート、出生率の異常な低下などと密接に結びついているのではないかと考えている。このような推論は、今の時点ではあくまでも1つの仮説にすぎない。しかし、このころの未来研究センターの研究の一環としてこの点をより厳密に検討することで、現代の諸問題に積極的にいろいろな提言ができたならば素晴らしいことである。すくなくとも、学問の社会還元という意味からすると、このころの未来研究センターあたりで是非本格的な研究をやって現代日本の心の病と社会の停滞の中に一筋でもいいから光明を見いだしていっていただきたいと期待している。

関連文献

Kitayama, S. (2002). Cultural and basic psychological processes-toward a system view of culture: Comment on Oyserman et al. *Psychological Bulletin*, 128, 189-196.
Kitayama, S., Duffy, S., Kawamura, T., & Larsen, J. T. (2003). Perceiving an object and its context in different cultures: A cultural look at new look. *Psychological Science*, 14, 201-206.
Kitayama, S., Duffy, S., & Uchida, U. (2007). Self as cultural mode of being. In S. Kitayama & D. Cohen (Eds.), *Handbook of cultural psychology*. Guilford Press.
Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, 98, 224-253.
Masuda, T., & Nisbett, R. E. (2001). Attending holistically versus analytically: Comparing the context sensitivity of Japanese and Americans. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 992-934.